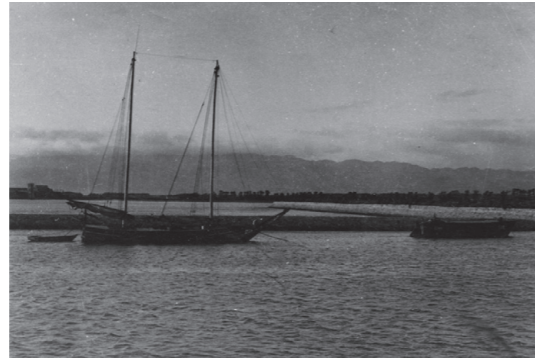




「あま(尼)」という言葉は、古くは漁民・海民を意味していた。また、「さき(崎)」は岬にも通ずる言葉で、「漁民・海民が住む海に突き出た土地」というのが、地名の由来と考えられる。奈良時代にはすでに港、漁村として発展し、平安時代の末頃には瀬戸内海を通して西国から都へ輸送されるさまざまな物資が往来し、なかでも京や奈良の巨大社寺を造営する材木を西国から運ぶ中継港として栄えた。江戸時代初期、大坂が幕府の西国支配の最重要拠点となると、その西にある尼崎には西の守りの要(かなめ)の地として、尼崎城が築城された。城の南には大坂から西国へと通じる中国街道が通り、城下町として栄えた。



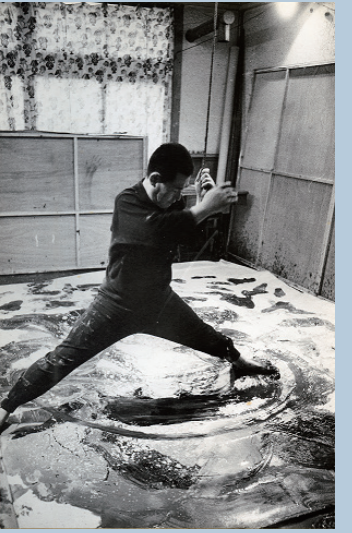
尼崎沖より六甲山を望む(大正4年頃)
出典「御大典記念献上尼崎市写真帖」



解体前の尼崎城(明治初期頃)

当時の尼崎は、大坂近郊にある流通の発達した先進地であり、漁業に加え農業の面でも綿や菜種といった商品作物が盛んに生産された。明治時代に入ると、政府の廃城令により尼崎城は取り壊されて堀も埋め立てられ、その跡地には市庁舎や学校などが建てられた。城跡の本丸部分には小学校(現:市立明城小学校)、北側部分には高等女学校(現:市立文化財蔵庫)が開設された。2018(平成30)年、西三の丸があった場所に再建された尼崎城では、このような尼崎の歴史を学ぶことができる。

1924(大正13)年、尼崎市西本町に呉服商・木市呉服店の長男として生まれる。幼少時より絵を描くことが好きで、父親が趣味で描いていた洋画に関心を持つようになる。



尼崎市立第三尋常小学校(現:市立明城小学校)に入学。その後、新設された市立竹谷小学校に編入して卒業。兵庫県立尼崎中学校(現:県立尼崎高等学校)の在学時に絵画部に入ったことが画家を目指すきっかけとなり、京都市立絵画専門学校(現:市立芸術大学)に進学して日本画を学んだ。

京都市立美術専門学校(1945年改称)を卒業後、洋画に転向して風景や人物画を描き始めたが、新しい絵画表現を求めて、天井から吊したロープにつかまり、床に広げたキャンパスの上に絵具を置いて縦横無尽に素足で描く「フット・ペインティング」という独自の方法を編み出し、国際的に高い評価を得た。

画家・吉原治良をリーダーとする前衛美術グループ・具体美術協会では結成翌年の1955(昭和30)年に会員となり、解散する1972(昭和47)年まで中心的なメンバーのひとりとして活躍した。2008(平成20)年、尼崎市にて逝去。

画家として歩み始めた白髪は、まず生まれ育った尼崎をはじめ大阪・京都・神戸など身近な風景を描いた。



《尼崎出屋敷と茂川》1948年



《尼崎庄下川阪神尼崎》1948年

もともと油絵具を好んだ白髪は本格的に油彩画を描き始め、作風は抽象的な表現に変わっていく。



《本能の結集》1952年



《流派I》1953年

20代の後半、白髪は初めて素足で描く絵画を試みた。1954(昭和29)年当時は奇想天外な描き方と受け止められたが、やがて絵画の可能性を切り開いた表現方法として認められるようになった。全身を使って描かれた作品の活き活きとした力強さは、時代を超えて観る人の心を揺さぶる。



《天福星撰天雕》1963年



《群青》1985年

若い頃の作品は赤と黒を基調とした暴力的とも感じられる力強さが際立つが、仏教に帰依し、修行をした50代以後の作品には、身体的のみならず精神的な強さが加わり、円熟した表現となった。

晩年には、色鮮やかでおおらかさをもった作品が加わり「フット・ペインティング」の豊かな世界が展開された。

※掲載作品は全て尼崎市所蔵。《天女の舞》2000年

画家を育てた昭和の尼崎の町は……

白髪一雄が幼少期を過ごし刺激を受けた昭和初期の尼崎は、城下町の風情を残しつつ、阪神間で花咲いたモダニズムの雰囲気をも併せ持つ町だった。実家の「木市呉服店」がある本町通商店街(右図)は、小売店・飲食店・銀行・芝居小屋・映画館などが軒をつらね、阪神間随一といわれ賑やかなところだった。近くにあった劇場でみた芝居や、南側にあった魚市場、西側にあった貴布禰神社の夏祭りなどの幼少時の記憶が、白髪の創作にも影響を与えた。

第二次世界大戦末期の1945(昭和20)年、本町通商店街は家屋疎開の対象となり消滅。戦後に作られた現在の中央商店街(右図)に多くの商店が移転した。

本町通商店街

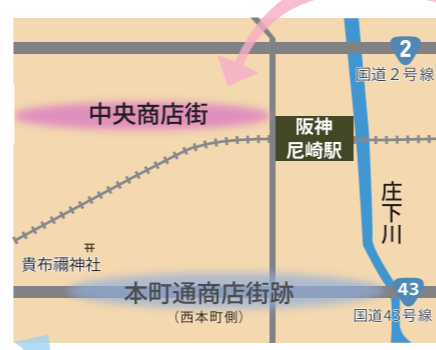


★西本町商店街
1938(昭和13)年頃

中央商店街



★中央商店街: 神田中通3丁目から西を望む
1953年(昭和28)年頃



まち歩き 〆 ここも見逃せない!

A 本町ビル

1923(大正12)年、尼崎共立銀行の本店として竣工。現在は国道43号に面しているが、かつては旧中国街道の道筋であり、尼崎旧城下の目抜き通りでもあった本町通の北側に位置していた。その後、銀行の吸収合併などにより山口銀行、三和銀行の支店となり、所有者変遷の後、現在名は「本町ビル」。市内に現存する鉄筋コンクリート造の建物としては最も古く、戦前にメインストリートとして賑わった「本町通商店街」の面影を残す貴重な建物。



旧尼崎共立銀行本店
1970(昭和45)年

B 尼崎信用金庫 記念館(尼信記念館)

1921(大正10)年に建てられた尼崎信用金庫の創業時の本店。同じ敷地内に「世界の貯金箱博物館」と、世界のコインコレクションや尼崎城に関連する展示に加えて様々な展覧会が開催される「尼信会館」がある。尼崎信用組合は「産なきものは協力し、産あるものに理解を求め、産あるものは産なきものに協力する」をモットーとして、地元の零細資金を集め中小資本などに融資することを目指した。現在名の尼崎信用金庫へ改称してからも通称「あましん」として親しまれる。



旧尼崎信用組合(現尼崎信用金庫記念館)★
1970(昭和45)年頃

C さくらい 櫻井神社

1882(明治15)年建立。1711(正徳元)年から幕末まで尼崎藩を治めた櫻井松平家の、初代松平信定(のぶさだ)から16代忠興(ただおき)までを祀る。尼崎城の西大手橋東詰にあった旧社を、1961(昭和36)年に国道43号線敷設のため現在の南城内に遷宮(本殿及び拝殿は建立当時のもの)。境内には最後の城主・忠興が設立に係わった博愛社(のちの日本赤十字社)の記念碑がある。忠興の従兄、忠顕(ただあき)の次男・櫻井忠剛(ただかた)は、初代尼崎市長であり、洋画家としても活躍。



櫻井神社1942(昭和17)年頃★

D 中村園

戦前に西本町通にあった本町通商店街で1896(明治29)年に創業。戦後に中央商店街に移転。尼崎城の別名を冠したオリジナルブレンド「琴城」などのほか、店頭で気軽に飲める「グリーンティ」が人気。商店街の発展にも尽くしてきた老舗茶屋。2016(平成28)年に創業100年以上の企業に贈られる「尼崎市100年企業表彰」を受賞。



明治40年頃/本町通商店街 写真提供:中村園

E ます せん 餅 干

江戸末期の安政年間(1854~60年)にかまぼこ職人だった榎本千太郎が、東本町で創業。戦後に中央商店街に移転。天ぷら(さつま揚げ)などの練り物を製造販売する。海に面する尼崎の南部には、本町通商店街の南側・中在家に魚市場があり大阪や京都に出荷していた。かつて尼崎に多くのかまぼこ店があったことを偲ばせる創業160年あまりの名店。



昭和/中央商店街 写真提供:餅干

F きんじょう あめ 琴城ヒノデ阿免本舗

明治初期に本興寺の西側、日産辻(ひよつじ)で創業。商品は水飴と固形飴のみ。原料は厳選した兵庫県三田産の極上のもち米のみを用いて、職人による手作りの古式製法にこだわり、3日かけて丁寧に作り上げる。尼崎城の近くにあったことから琴城の名を冠する。その「琴城」に由来する店のロゴは「琴柱(ことじ)」(お琴の弦を支える道具)をかたどったもの。城下町の名残をとどめる老舗飴屋。



昭和~平成/開明町 写真提供:琴城ヒノデ阿免本舗
出典:「兵庫県のおもしろい店100」
発行:(社)中小企業診断協会 兵庫県支部(平成元年)